



ひらひだより

No.7. 2020. 9. 30

「天地始肅」（てんちはじめてしゅくす）天地の気が肅然として万物があらたまる頃
これは二十四節気七十二候の 8/28~9/1 の言葉です。うちのトイレには歳時記カレンダーがかかっているのですが、初めてこの候を見た時、とても惹きつけられました。空が高くなり、稲穂が色づき始め、たくさんの植物が花を咲かせ種を結び、さわやかな風が吹き渡る…この素晴らしいなともいえない豊かな季節を、びったりと表現しているように感じました。「肅す」は落ち着いて静かになるという意味があるそうです。春・夏と、より大きく大きくと成長してきた植物たちが、成長をやめ、今まで外に発してきたエネルギーを内に向け、種を結び子孫を残し、冬への準備に向かっていく。この季節に、どことなく厳かな尊いような気配を感じるの、そのせいかもしれません。毎年この候になると、自然の美しさに感謝の気持ちが湧き上がり、自分も気持ちがあらたまるような気がしています。

2 学期が始まってからのこの季節は、子どもたちの遊びも豊かな実りの時期に入っているように感じます。安心した笑顔からは、ひとりひとりの子どもにとって、びびびが心地よい居場所になっていることがわかります。ひとつの遊びにかかる時間が長くなり、関わり合いの中でさらに面白いことに発展したり、日をまたいで続いたり、友達との関わりが深まる中、遊びも深まっています。どんぐりさんたちも、スタッフのもとを離れてそれぞれの世界を広げています。そして友達との関わりが増えると同時に、ぶつかり合う姿もよく見られるようになってきました。

先日、どんぐりさんの帰りの集まりで、けんかが始まりました。（以下、敬称を省略させていただきます）はなと壽穂が椅子の取り合いから、お互いをたたきはじめました。はながバチ！とたたくと、たたかれた壽穂は「イタイ！」と言って、はなをバチ！とたたくと…イタイ！バチ！、イタイ！バチ！を繰り返しています。間に入ろうとしましたが、私のことは全く眼中にない様子。そこに向日葵もなぜか加わり「イタイ！バチ！」が続きます。みんな真剣な顔で、たたかれると痛くて涙を浮かべますが、またたたき返します。そのうち「わー」と三人で泣き出し、今度は三人並んで切株から降りてチップの上に座ります。そしてチップの投げ合い…と続きます。壽穂の表情からは悔しい気持ちが滲み出ている「けんか」をしていることが伝わってきますが、はなと向日葵は真顔で涙も浮かんでいるものの、たたいたり、相手や自分の気持ちを味わったり、「けんか」を経験しているようにも見えます。集まりの終わりの時間がきて、さくらひろげへ向かう時になると、はなが急にけんかをやめて「手、つなごう」と壽穂に手を差し出しました。壽穂は険しい顔で手を後ろに回して首を横に振り、拒否。それを見たはなは不思議そうな顔をしていました。けんかの間、3人のとても真剣な様子に、なんだかとっても大事なことをしているような気がして、あまり介入せずに見守っていましたが、けんかは集まりの時間いっぱい続き、そのせいで、帰りの集まりは中途半端になってしまいました。まわりでじっと見ていた子どもたち、けんかの気持ちのまま怒っている子、けんかして涙の子…みんなの気持ちが揃うことなく、「楽しかったね、また明日もいっぱい遊ぼうね」と気持ちよくさよならすることもできませんでした。

家に帰って、今日のけんかを思い出している時、ふと娘のけんかを思い出しました。

現在 6 歳の娘（A）が 2 歳だった頃、小さい頃からよく一緒に遊んでいた幼馴染の N 君と大げんかをしたことがありました。よく預け合いをして、近所を散歩したり、一緒にご飯を食べたりして長い時間を過ごしました。言葉はあまりなくても、笑い合って、手をつなぎ合って、草はらを駆け回っていた二人です。その日はうちで N 君を預かり、午前中にたっぷりお散歩をしました。帰ってきて私は昼食の準備を、子どもたちは電車のおもちゃで遊び始めた時でした。きっかけはよく覚えていませんが、電車の取り合いか何かだったような気がします。取り合って、引っ張り合って、お互いに顔を歪めて、「ばくの！」「だめ！」とか何か言い合っていたと思います。そのうち N 君の手が出て、A の髪の毛をギュッと引っ張りました。A も負けずにギュッと引っ張ります。にらみ合ってギュッと引っ張り合っていた二人でしたが、そのうち「わ～ん、わ～ん」とお互い大声で泣き出しました。顔を真っ赤にして泣いている二人。痛み、通じない思い、悔しさ、…いろいろな気持ちが溢れていたのでしょう。二人があまりにも真剣にやり合っている姿に、私はどうなるかな、と少しドキドキしながら背後からそれをじっと見ていました。そのうち大泣きが小泣きになり、目を真っ赤にしてしゃくりあげ、落ち着いてきました。そして涙目の A が、N くんの手をそっと撫で始めました。N くんは真っ赤に泣きはらした目で A を見てそれを受け入れていました。そして二人のけんかは終わりました。私は、感情をむき出しにして 100% でぶつかりあった二人の姿に、感動していました。その凛々しい姿に畏敬の念を感じたほどでした。私たち大人は言葉が話せるし、もっと上手にコミュニケーションをとることができるけれど、これだけ真摯な関わりをすることがどれほどあるだろう。こんなに大きなものを得る経験がどれだけあるだろう…。お昼のまぶしい太陽に、子どもたちの柔らかな茶色い髪の毛が照らされている、神々しいような光景と共に、心に残っています。

びびびでスタッフとして子どもたちと関わるようになってから、私はこのような真摯な子どもたちの姿にたくさん出会わせてもらいました。その度、子どもたちが持つ力の凄さを感じ、たくさんの学びをいただいています。眉間にしわを寄せた顔、怒って赤くなった顔、困惑して今にも泣きそうな顔、無表情で固まっている顔…びびびはそんな「顔」を見守ることができる場所だと感じます。葛藤の中でひとりひとりが得ていくものを大切に見守っています。自分で悩んで、考えて、試行錯誤した子どもたちは、自分の言葉を発し、自分の道を歩いていく。森の中に立つ小さな 2 歳児さんの背中が、とても頼もしく、立派に見えます。ウイルスや温暖化など、世界中が困難に直面していく時代ですが、びびびで感じた子どもたちや森の力は、ゆるぎない光だと感じています。子どもたちと歌うこの歌が、胸に沁みわたる 9 月です。

空は青いよ 川が光るよ この世界は美しいよ
風が吹いたよ 花が揺れたよ 私たちは 生きているよ （てのひらにうたをのせて）

11 月から出産のため長期のお休みをいただきます。子どもたちや保護者の皆様、スタッフの温かい支えの中で、気持ちよく働かせていただけたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとうございます。

：水野さと子

木々のみちくさ Sketchbook 10月

本格的な実りの木がはじまりましたね。少しづつ色づいてきた葉のかげで、色鮮やかな赤、紫、青、オレンジなどのかわいらしい木の葉が森をまどっています。鮮やかな色は鳥たちの目にとまり、

食べてもらうため、その色合いをみて木たちが美しいと思うのはとても不思議ですね。

美しい木の葉たちとぜひ、みつけてみて下さいね！
(葉々恋)

ひろびの森にある

今月はゴボウが主です。

チョウセンゴボウ (朝鮮五味子)

五つの味という名の通り、甘、酸、苦、辛、塩と複雑な味のする実。つるごいせの木からつるぶらんとぶらぶらつるの葉のかわいらしい

果実酒にするととてもおいしいのわいっぴんの酒を咬止めや滋養強壮に効果あり。茶葉としても使われます。

ムラサキキキギ (紫式部)

美しいその実が子どもたちにも鳥たちにも大人気。食すとほんのり甘みもあります。

ソリバナ (吊り花)

マユミの仲間でも知らずはマユミの仲間でも臭がりつに繁ります。赤とオレンジの鮮やかな色組み合わせは茶花ほどは目ももてないが、鳥たちには果実がおいしいので人気(海)です。

マユミ (真弓)

桃色のかわいらしい実がつに繁り中からオレンジの種子がぶらんとぶらぶらつる。以前、ひろびの子が「桃のころん」とよんでいたのが忘れられません。

サワアタギ (沢菰木)

藍色の美しい実をつける。海軍船の入口の少し手前の砂利道の林縁にあるので、ぜひ採ってみて♪

今月の Teatime

ノブドウ <蛇葡萄>

紫色、藍色、深緑

様々な色合いの美しい実が秋の野原や田んぼの畦をまわります。実はこの色は虫が寄生することで色が濃くなる。お茶には、茎、葉、花を使います。

ノブドウは収獲力が高いため、血液循環をよくする働きがあります。

その美しい姿を眺めるだけでもお茶Time

楽しんでみて下さいね♪

田んぼと畑から



野山に自然に生えている植物たちは、農薬や肥料などなくても病気になることは少なく、虫が過剰に発生することもなく、毎年花を咲かせ、実をつけます。自然の営みに寄り添い、肥料や農薬に頼らず、主に自生に近い環境で農作物を栽培する自然栽培……肥料、堆肥を投入しませんので作物は養分を求めてグングン根を張り、根が張ること、植物の生命力は非常に強くなり、過剰な肥料の臭いに寄ってくる虫も少ないので、農薬などの必要性がなくなり、台風等の被害にも強く、野生植物のたくましさも備え、味もとてもおいしい。

そんな風に育たない、育たぬお米を食べたいと、ひろびの田んぼでは、農薬も53%、肥料や堆肥も基本は投入しません(田んぼの微生物を活性化し、食味をよくするための米ぬかや貝の化石は少し入れています)

品種はササシグレと言います。農薬や肥料を使う以前の定番品種で、昭和36年には東北地方で第1位の栽培面積を言記録。しかし、昭和38年の境にして、ササシグレのことも、ササニシキにその座を譲り、昭和46年以降姿を消し、47の品種となりましたが細々と農家の飯米用として栽培され続けてきました。奇跡のリンゴの木村秋則さんがササシグレの苗を茶色やさいようにと分けてくれたのが、ご縁で、えりさんのご主人のところにきて、えりさんとわたしの田んぼでも植えて、種をつないだものが昨年ひろびの田んぼにきたわけです。

ササニシキは当初から親月券りと言評判の箱ではありましたが、唯一食味だけはササシグレを越えられなかったと言う声もあります。米の貴婦人という愛称をもつそうです。また、アミロースが高く、アミロペクタンが低い高アミロース米と言われています。これは、先祖にもち米系系統を持たない性質で、モチモチして甘いコシカリやひとめぼれなど、近代の品種改良で生まれたおコメにはない特徴です。この特徴のおかげで、血糖値が上がりにくい、アレルギーをもつ人が食べても症状が出にくいと言われています。

冷めても美味し、新米を過ぎて翌年の梅雨を過ぎても食味が維持されています。あざりと食ひきのこない味は、毎日の主食としてうるち米本来のお米らしさを感ぜさせてくれます。

今年の出来はどうでしょう。みんなて田んぼ直えをした苗が大きくなって箱刈りの日を待っています。おおきくみのことまたちが作ったかかし達が新たに見守ってくれている田んぼで、今度は収穫できることが楽しみです。